

9/23/18

「主の喜ばれる道を歩む」

詩篇1

Introduction

おはようございます。このようにしてまた皆さんと、共に御言葉を聖書から学ぶ機会が与えられたことを感謝しています。

また、いつも皆さん一人一人が親しく、親切に接してくださることを感謝しています。5月の卒業までの間、この教会で仕える機会を仁先生が与えてくださったことを感謝するとともに、皆さんとこれから共に成長していくことができることを心から楽しみにしています。

さて、早速ですが、一緒に神様が今朝私たちに教えてくださることを見ていきましょう。今朝のテキストは詩篇の1篇です。皆さんもよく知っておられる箇所の一つだと思います。この中で神は私たちに大切な真理を教えてください。しかし、その内容を見ていく前に皆さんに一つ質問があります。

皆さんはハイキングって好きですか？最近日本では、山ガールと言ったような言葉もでてくるほど、登山であったり、ハイキングというものが世の中に浸透してきています。また特に、このロスでは多くの素晴らしいハイキングスポットがあります。健康に良いだけでなく、自然の素晴らしさを感じられるなど数々良い点がハイキングにはあるわけです。私自身も、機会さえあれば今でも喜んでいきたいほどです。

しかし、確かにハイキングには多くの良い点があるのは事実ですが、同時に、時に悲劇となりうることもニュースなどで見て取ることができます。ある統計によれば、昨年約160人が登山中、亡くなったと記しています。でも、皆さんこういった事故の最大の原因が一体何かご存じですか？ ある一つの統計によれば、約40%の事故は、道に迷うことが原因だという調査結果を表しています。

ある人は、間違っている道を歩んでいるにも関わらず、「自分は正しい行程を歩んでいる」と思い込んでいたり、ある人は自分の勘に頼るわけです。そしてその結果、森の奥に入り込んでしまったり、崖から落ちてしまうわけです。ですから、間違った道を歩む、もしくは、道に迷うというのはその人に大きな問題をもたらすことがあるということです。そして、これは私たちの人生にあってはまる真理です。

今朝のテキストである詩篇1を読めば、私たちは二つの異なる道を見ることができます。片方は神が祝される道、片方は神が憎まれる道です。ある人は正しい道を歩むゆえに神に喜ばれ、ある人は間違った道を歩むゆえに、神に喜ばれません。一つの道は人に祝福をもたらし、もう一つの道は人に裁きをもたらします。これらの二つの道は明確に違うわけです。間のグレイゾーンはありません。正しい道と誤った道の二つしかないわけです。

メッセージを始めるにあたり、皆さんに覚えていて欲しいこと、それは神がこのテキストを通して皆さんにこう語っているということです。「全ての人がどちらかの道を歩んでいる。あなたも必ずどちらかを歩んでいる」と。この中の誰一人として、どちらにも属していないという人はいません。両方の道を行ったり来たりしている人もいません。必ず皆さんも、神の喜ばれる道か、神に憎まれる道を歩んでいるのです。

ですから、私たちは自分自身にこう問いかけてみなければいけません。

「私は今どちらの道を歩んでいるのだろうか」と。あなたは今日、正しい道を歩んでいるのでしょうか？それとも間違った道を歩んでいるのでしょうか？これはとても大きな問題です。なぜなら、あなたがどこを歩んでいるのかは今に影響を与えるだけではなく、永遠にも大きな影響を与えるからです。

そして、残念なことに、あまりにも多くの人が今自分がどこを歩んでいるのかを正しく理解していません。自分は正しい道を歩んでいるだろうと思いついでいるのかも知れません。しかし、ハイキングの例でもそうだったように、間違った道は重大な問題をもたらします。ここでは、神は間違った道には神からの裁きが待っていると教えているのです。だからこそ、今一度、自分に問いかけてみてください。「私は今どちらの道を歩んでいるのだろうか」と。

詩篇1篇は私たちに明確にそれぞれの道の違いを教えてください。主に喜ばれる正しい道を歩むということがどういうことかを教えてください。神は警告しておられます。「決して道に迷ってはいけない。正しい道を歩み続けるように」と。あなたの応答は何でしょうか？ 正しくこれに答えるためにも、聖書から正しい道と誤った道について共に学んでいきましょう。

I. 正しい道と喜ばれる人(1-3節)

さて、まず初めに、私たちはこの1-3節に神の喜ばれる正しい道を見ることができます。

1節は「幸いなことよ。」という言葉で始まっています。この言葉は、嬉しさや満足といった単なる感情を表すだけの言葉ではありません。むしろ、この言葉は神を恐れ、神の御心を追い求める人に神が与えられる好意、恵みを指す言葉です。神を追い求める人の喜びは主の内にあるわけです。だからこそ、どんな状況にあったとしても神にあるあふれんばかりの喜びと本当の満足を持つことができます。ペリピ4:11で、パウロはこう言っています。「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。」パウロは皆さんも使徒から学ばれたように、多くの試練、困難を経験していました。私たちの目から見れば、不満や絶望を覚えるようなものも数多く体験していたわけです。しかし、そのパウロが、「私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました」という訳です。

ここでカギになるのは、本当の幸せというのは、私たちの努力や周りの状況に基づくものではないということです。もしそうなら、パウロはどんな時も喜ぶとは言えなかったでしょう。しかしそうではなく、本当の幸せというのは神からのギフトです。神と正しく交わりを持っている者が神の内に本当の喜びを見いだすことができるのです。

詩篇の著者は、「幸いなことよ。」と言いました。この正しい道を歩む人はこの世が与えることのできない、神からの本当の喜びを持っていました。どんな状況にあっても、神にあつて満足を抱いていました。しかし、それだけではありません。著者は続けてこの喜ばれる道を歩む人物の特徴を3つあげてくれます。

(1)悪から完全に離れる(v.1)

まず最初の特徴として挙げられるのは、この人物は、「悪から離れる完全に離れる」人物だったということを1節の続きから見ることができます。

もう一度、1節よく見てください。「歩まず」「立たず」「座に着かなかった」と三つの動詞がここで使われています。これらの言葉は、この人物が悪とは全く関わりがなかったことを強調しています。

この人は悪者のはかりごとに歩まないわけです。言い換えれば、この世の間違った、神に反するアドバイスに耳を傾けて生きることがないということです。罪に溢れたこの世にはなく、それよりも遙かに優る神の言葉だけに心を止めて生きるわけです。ヤコブ1:17はこう言っています。「すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から来るのであつて、光を造られた父から下なのです。」この人物は、どこから良いものが来るのかを知っている訳です。

またこの人物は、罪人の道に立たないわけです。罪人とは神に従わずに生きている人のことです。神の言葉に逆らい、神の憎まれることをし続けているわけです。しかし、この神に喜ばれる道を歩んでいる人は、神の命令を喜んで守り、神の喜ばれることをし続けているわけです。

そして、最後にこの人物は、あざける者の座に着かないわけです。あざける者の座に着くとは、正しい者を嘲る者と親しい関係を持っているということです。しかし、この神に喜ばれる人は、あざける者の座に着かず、自分を正しく保ち、主に忠実に仕えるわけです。明確なのは、この人物の生活は、悪から離れ、きよさを保つ、そのようなものであると言えます。

ここで一つ皆さんに覚えていて欲しいことは、この人物が本当の喜びや満足を持っていたのは、悪や困難を経験しなかったからではないということです。むしろ、この人物はそういった悪を経験したわけです。しかし、その中であつて、罪の誘惑や悪に対して、戦つて勝利をしたのです。どんな困難な状況にあつたとしても、この人物は主に忠実だったからこそ、主からくる本当の幸せを味わっていたのです。

さて、少しここで自分の生活を振り返ってみてください。

私たちの住む世界は、多くの困難や罪に溢れています。友人関係、家族や親族関係に悩んでいる方もいるかもしれません。もしかすると、職場にあつて困難を覚えている方もいるかもしれません。

また、ある人は経済面や健康面で苦しみを覚えているかも知れません。クリスマスチャンであれば、罪との葛藤を日々覚えていることでしょう。私たちの周りにはたくさんの問題やチャレンジが転がっています。それは紛れもない事実です。では、皆さん、あなたがそのような困難に出くわしたとき、どこにまず解決策を見いだそうとするでしょうか？インターネット上ででしょうか？信頼できる友人でしょうか？もしくは、神の言葉にでしょうか？もちろん、インターネットで検索することや、友人に相談することが間違っているわけではありません。しかし、もし、あなたが神を最初に求めないならば、あなたは自分の置かれている状況に不満や不平を覚えるかもしれません。詩篇に描かれている人物のように、本当の満足を与えてくださる神に、私たちは助けを求めなければいけないのです。そして、神に自分の全てを委ねる時、私たちはこの世が決して与えることのできない幸せを見いだすことができるのです。

(2)神の言葉を瞑想する(v.2)

二つ目の特徴として挙げられるのは、この人物は神の言葉を瞑想しているということです。言い換えれば、神の言葉をどんなときも自分自身の中で深く思い巡らしているということです。

2節はこう言っています。「まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。」この人物は神の命令を喜んで従っていたわけです。昼も夜も、要するに、どんなときも主の教えを愛し、喜びとしていたわけです。この人物は、神の言葉の素晴らしさを知っていました。詩篇119:103はこう言います。「あなたのみことばは、私の上あごに、なんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。」彼にとって、神の言葉は人生において最も大切なものだったわけです。少し、誕生日プレゼントを貰った子供の姿を想像してみてください。お孫さんなどもおられる皆さんは、容易に彼らの反応を思い浮かべられると思います。もう叫び声を上げながら、せっかく綺麗に梱包している紙をびりびりに破くわけです。そして、一度その中身を手にするやいなや、一日中、ずっとそれで遊んでいるわけです。どんな時も、どんなところにもそれを持ち歩き、寝るときにさえ枕元までそれを持っていくわけです。ある子供は自分のプレゼント抱きかかえたまま寝るわけです。どうして彼らはこのようなことをするのでしょうか？何かしなければいけないからでしょうか？いいえ。彼らはそのプレゼントが大好きで、喜んでいるからするわけです。ですよね？

子供たちにとって、そのプレゼントが最も大切なものなわけです。

この詩篇の人にとって、神の言葉は彼の人生にあって最も大切な宝物でした。問題は私たちです。「私たちは、神の言葉に対して同じような思いを持っているでしょうか？ 私たちは神の言葉を自分の人生の中で最も大切なものだと考えているでしょうか？」

ペテロは1ペテロ2:2でこう言いました。「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」神の言葉無しでは、私たちの霊的な成長はないわけです。詩篇119:105はこう言います。「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」神の言葉は私たちの道を照らす光なわけです。神の言葉がなければ、私たちはどこに行けばいいか分からない訳です。2テモテ3:16はこう言います。「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」神の言葉は私たちを教え、戒め、矯正し、訓練し、私たちの生活を変えるわけです。聖書が繰り返し、繰り返し私たちに教えること、それは私たちにとって聖書は最も必要なものであるということです。問題はあなたはこれを心から信じているかということです。そしてもし、それを心から信じていると言われるなら、あなたはどれだけ御言葉の学びに時間を日々とっておられるでしょうか？もし、あなたが御言葉がいかに素晴らしく、それを学ぶことの喜びを知っているのであれば、あなたはそのために時間を取られるはずです。まるで、プレゼントを貰った子供がそれを手放さないように、私たちは神の言葉を手放したくはないはずです。

どうか、覚えてください。私たちの希望、喜び、慰め、平安、教え、悪と戦うための武器、それらは全て神の言葉からきます。だからこそ、御言葉を私たちは学び続けなければいけないのです。もし、この中でこれまで御言葉と時間をあまり共にしていなかったという人がおられるなら、今日からそれを始めてください。聖書が私たちの生活の基盤だからです。

(3)枯れることのない実を結ぶ(v.3)

最後にこの人物の三つ目の特徴として挙げられるのは、「枯れることのない実を結ぶ」ということです。

3節はこう言っています。「その人は、水路のそばに植わった木ようだ。」この木は何か適当な場所に勝手に生えた木ではありません。意図的に水路の側に植えられたわけです。どうしてか。それは、その木が必要な栄養分を水路から得るためです。まるで、木が必要な栄養分を得るように、この人物は神の言葉から必要な栄養分を得るわけです。

この詩篇の人物は悪から完全に離れ、神が聖書を通して教えることに瞑想していました。その結果どうなったか？ 3節はこう続いています、「時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。」神とその言葉に対する誠実さ、それは神からの溢れんばかりの祝福をその人物にもたらします。だからこそ、枯れることも、風で吹き飛ばされることもなく、豊かな実を結ぶのです。何をしても栄えるんだと。

もちろん、これはもし私たちが神の言葉に専心すれば、困難や試練に決して生活の中で会わないという意味ではありません。私たちは例外なく、皆そういったものを経験するわけです。さらに言えば、周りを見渡せば、神を知らず、自分の好き勝手にしながら、何の困難を覚えていない人を私たちは見るかもしれません。多くの場合、クリスチャンこそが言われも無いことで罵倒されたり、多くの試練を経験している人たちかもしれません。そういったこともあり、ある人は、「じゃあどこにクリスチャンとして生きる意味があるんだろうか。どこに本当の満足、喜びがあるんだろうか」と思われた人もいるかもしれません。

そんな皆さんに覚えていただきたい真理はこうです。もし、あなたが神の言葉に信頼し、それに身を捧げるなら、あなたが為す全てのことには永遠の価値があるのだということです。一時的、短期的に見れば確かに、あなたの置かれている状況は苦しく、悲しみや絶望を覚えるかもしれません。しかし、神の永遠の目から見れば、それは価値があるものなのです。なぜなら、そういった試練を通して、神の言葉に信頼することによって、一人一人はキリストにより似た者になっていくからです。良い時も悪い時も人生にはあります。カギになるのは、神の言葉である聖書です。誰でも神の言葉に根ざすのであれば、神の前に素晴らしい実を結び、本当の幸せというものを抱くことができるのです。

さて、ここまで正しい道を歩む人物の3つの特徴を見てきました。悪から離れ、神の言葉をいつも思い巡らせ、そしてどんなときも神の言葉に信頼する人物でした。

だからこそ、枯れることのない実を結びました。さて、問題はあなたはこのような特徴を持った人物だろうかということです。あなたはこのような特徴を持った神の喜ばれる正しい道を歩んでいる人物でしょうか？一人一人自分自身に問いかけてみなければいけません。

II. 間違った道と喜ばれない人(vv.4-6)

さてここまで、私たちは神の喜ばれる正しい道について見てきたわけですが、最後4-6節では全く正反対の例を見ることができます。ここでは、神の前に間違った、喜ばれない道が描かれています。

皆さん、この道というのは、ひどく、醜く、価値のないものです。この道は光がなく、苦痛しかありません。この道を歩む者には、幸せなどありません。そしてそれ以上に、神はこの道を最後には滅ぼされます。なぜなら、この道を歩む者は神が1節ですると命じておられた罪深いことを喜んでするからです。この道を歩む者は神が望まれることよりも、自分が望むことします。この人物の関心は自分の罪深い心の望むことであって、神の言葉が命じることではありません。神や神の言葉を愛するよりも、自分自身が一番なのです。神が中心の生活ではありません。自分自身が中心なのです。だからこそ、詩篇の著者は、この人物を「風が吹き飛ばすもみがらのようだ」と表現したのです。

このもみがらという言葉ですが、これは面白い言葉で、農家の収穫の時期に用いられたような言葉です。想像してみてください。農家の方が全ての収穫物を一箇所に集めるわけですが、その中にもみからも紛れているわけです。もみからというものは、食べることも、市場で売ることもできません。もみからには全く価値がないわけです。それゆえに、農家の人はもみがらがあればそれを捨ててしまうわけです。これは神の喜ばれない道を歩む人の運命をまさしく表しています。

神を信じず、神に逆らう者は神の前に、罪深く、無力で、無価値な存在です。こういふとある人は、「いやそれは言い過ぎです。未信者にも何かしらの価値はあるはず。この世には多くの親切で、優しく、自分自身を他の人や社会のために素晴らしい人がいます。」と言われるかもしれません。

しかし、残念ながら私たちが覚えなければいけないのは、私たちはきよい、完全な神の前に出て裁かれるということです。確かに人間的に見て、素晴らしいことをする人はたくさんいるかもしれませんが。しかし、義なる完全な神の前には、例外なく全ての人が罪人なのです。ローマ3:10が明白にこう言っています。「義人はいない。ひとりもない。」人を裁くのは人ではありません。神ご自身です。だからこそ、どんな素晴らしい行為も神の栄光のために為されたものでないなら、神の前には価値のないものなのです。そして、価値のないものであるがゆえに、もみがらのように捨てられてしまうのです。

だからこそ、神からの救いは決して私たちの行いからはきません。どれだけ良い行いをしようが罪の赦しを得るのに十分な人間的な行いは存在しないのです。ただイエスキリストの血潮によって、私たちは神と和解させられるのです。神であり、人であったイエスキリスト、私たちの罪を赦すために十字架で死んで下さったのです。決して私たちがこの主の犠牲に値したわけではありません。しかし、主は私たちのことを心から愛してくださったがゆえに、ご自分を私たちのために捧げてくださったのです。私たちは主の恵みによってのみ、救われたのです。

エペソ2:9はこう言っています。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」

もし、まだイエスキリストを自分の救い主として心から受け入れていない方がおられるのであれば、今日この方を自分の主として認めてください。そして、この方のために歩み始めてください。私たちには誰一人明日のことは分かりません。どうか今まだ時間のあるときに、その決心をしてください。

5節をもう一度見てください。この神の喜ばれない間違った道を歩む者の結末が記されています。「それゆえ、悪者は、さばきの中に立ちおおせず、罪人は、正しい者のつどいに立てない。」

もしかしたら、この人は今は幸せで気付いていないかもしれませんが。しかし、神の前にはこの人には一切希望がないわけです。最後の日、主の前に立つ時この人は主に受け入れられることはありません。自分がしたことに基づいて、神の永遠の裁きを受けなければいけないのです。

神の前、正しい者の前から取り除かれるのです。そしてそこで後悔しても、二度目のチャンスはないのです。神の裁きの前に悪を行う者は、恐れおののくことしかできないのです。

最後に、詩篇の著者は6節でこうまとめています。「まことに、主は、正しい者の道を知っておられる。」言い換えれば、主は正しい物を愛し、守り、祝福されるということです。しかし反対に、「しかし、悪者の道は滅びうせる。」と。悪者は必ず、完全にまた永遠に正しい神によって滅ぼされます。地獄にあつて、神の怒りに苦しまなければいけないのです。そして、そこには幸せも、喜びも、希望も満足も平安も何もありません。

Conclusion

さて、兄弟姉妹の皆さん、一番最初に私は皆さん一人一人が自分自身にこう問いかけてみてくださいと言いました。「私は今どちらの道を歩んでいるのだろうか」と。あなたの答えは一体何でしょうか？今日一緒に見たように、二つの道はそれぞれ全く異なるものです。片方は神が祝される道、片方は神が憎まれる道でした。ある人は正しい道を歩むゆえに神に喜ばれ、ある人は間違った道を歩むゆえに、神に喜ばれませんでした。一つの道は人に祝福をもたらし、もう一つの道は人に裁きをもたらすものでした。あなたは一体どちらの道を今歩んでいるのでしょうか？

もし、あなたが今神を拒み、御言葉に従わず、神が望むことではなく、あなたの望むことだけを行っているのであれば、あなたの道の終わりは明白です。神は必ずその終わりに裁きをもたらされます。だからもし、その道を今歩んでいるのであれば、今すぐに悔い改めて、正しい道を歩み始めてください。決して道に迷ってははいけません。神を喜ばせる道だけにあなたの本当の幸せがあるのです。

もし、今正しい道を歩まれているのであれば、どうかこのまま一步一步忠実に歩み続けて下さい。必ずその道の途中には困難や試練が待ち受けていることでしょう。しかし、この事を覚えて下さい。「神はいつもあなたと共におられ、そしてあなたを守ってください。神はどんな状況にあつても満足と喜びを与えてくださる。そして、正しい道を歩む者に最後には大きな祝福を与えてくださる。」と。